長大病院は今

養生所から150年

◁6▷

地域医療

再生へ教育拠点設置

地方の大学病院にとって、地域医療の支援は大きな仕事だ。長崎大学病院は地域の基幹病院に勤務医を派遣してきたが、医師不足の中で要請に十分応えられなくなってきている。だが、新しい形での支援も展開、成果を挙げている。

県北・平戸島中部にある平戸市民病院には、常に若い研修医の姿がある。長崎大学病院の「へき地病院再生支援・教育機構」の教育拠点が設置され、協定を結んだ全国8病院から研修医が派遣されているからだ。

9月は横浜市と広島市の病院から3人を受け入れている。横浜市立大付属市民総合医療センターの尾崎優美(25)は外来や健診、高齢者宅への往診を通じてさまざまな患者に出会い、「少ない人員でも対応する地域医療の実態がよく分かった。専門にとらわれずに診察を担当することで、医師としての幅が広がったように思う」と充実感を漂わせる。

同機構は地域医療を担う人材を育てようと2005年に設立。これまでに研修医39人を受け入れ、それぞれ数週間から数カ月をかけ指導している。平戸市民病院にとってはマンパワーの確保ができ、院長の押淵徹(64)は「常勤医の負担軽減だけでなく、若者が真摯(しんし)に学ぶ姿が常勤医の刺激になって病院の診療の力も高まった。機構の取り組みは医師不足に悩む病院再生のモデルケースになり得る」と評価する。

長崎大では04年、五島市の五島中央病院に離島医療研究所を設置、同大医学部生が臨床実習に訪れている。同機構長で長崎大副学長の調漸(56)は「地域では患者を診るだけでなく、地域全体の医療問題を保健・福祉行政と協力し解決する人材が必要。それは大学病院の中だけでは分からないこと」と話す。

一方、地域に人材を送り込むだけでなく、情報技術（IT）を活用した取り組みも進んでいる。病院で受けた検査結果やカルテなどの患者情報を、インターネットで診療所が閲覧できるネットワークシステム「あじさいネット」への参画だ。

へき地病院再生支援・教育機構の教官（左）と超音波エコーの読影に取り組む研修医　＝平戸市草積町、平戸市民病院（緒方秀一郎撮影）

ITで患者情報の共有も

患者情報は通常、かかりつけ医でも病院に出向いて閲覧する必要があるが、診療所からリアルタイムで入院患者の経過を観察することが可能。重複処方や検査を避けるほか、患者の状態を病院と診療所でダブルチェックできる。さらにカルテなどを通じて、病院で導入している最新の医療知識・技術を開業医が学べる教育効果もある。

同ネットは04年に県央地区で始まり、現在では長崎市を含め情報提供病院は14カ所、利用する診療所は144カ所に拡大。長崎大学病院は09年に参加し、システム開発の中心的役割を同病院医療情報部が担当している。

今後は遠隔画像診断の導入や、介護福祉などとの連携も構想。同部准教授の松本武浩(49)は「病院完結型ではなく、地域完結型という新しい医療スタイルが長崎から発信できるかもしれない」と展望している。

（敬称略）